

第10回 幼児教育実践学会 □頭発表

『楽しみに思う心を育む運動遊び』



学校法人佐賀龍谷学園
九州龍谷短期大学付属 龍谷こども園
教頭・主幹保育教諭 浅井 太希
九州龍谷短期大学 保育学科
准教授 竹森 裕高



研究の動機

○就学前の幼児にとって、両親の就労や核家族化、IT化、地域の関わり減少、保育時間長時間化等により、体力や運動能力の低下も問題の一つとなっているのではないかと。今後も一層、幼児にとって重要な問題となるのではないかと。

○保護者の運動習慣や運動意識や幼児の体力測定結果を職員と共有することで、より質の高い幼児教育になるのではないかと。

○昨年度の学校体育研究大会での実践発表

本園の子どもの実態

明るく、素直な子どもが多い

友だちと一緒に工夫しながら、遊びを進める子どもが多い



すぐに「疲れた」と言う

園庭でよく体を動かす子どもとそうでない子どもの差が大きい

体力測定結果・保護者アンケートより

○体力測定内容

- ・ 5 歳児クラスを対象
- ・ 4 月と 2 月の年 2 回測定を実施
- ・ 測定内容： 2 5 m 走・ テニスボール投げ・ 立ち幅跳び

| | | 立ち幅跳び (cm) | | テニスボール投げ (m) | | 2 5 m 走 (秒) | |
|----|----|---------------|--------|-----------------|------|----------------|------|
| | | 4 月 | 2 月 | 4 月 | 2 月 | 4 月 | 2 月 |
| 男児 | 平均 | 101.42 | 110.45 | 7.55 | 9.94 | 6.73 | 6.27 |
| | 評価 | 3.08 | 2.91 | 3.25 | 3.24 | 2.92 | 2.86 |
| 女児 | 平均 | 94.14 | 106.96 | 5.06 | 6.01 | 6.85 | 6.42 |
| | 評価 | 3.00 | 3.25 | 3.13 | 3.14 | 2.91 | 2.86 |

体力測定結果・保護者アンケートより

○保護者アンケート内容

- ・ 子どもの生活習慣について
- ・ 子どもの運動意識
- ・ 子どもの運動習慣
- ・ 保護者の運動意識
- ・ 保護者の運動経験
- ・ 子どもの運動に対する考え方

新幼稚園教育要領

心身の健康に関する領域「健康」



ねらい

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう
- (2) 自分の体を十分に動かし、
進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を
身に付け、見通しをもって行動する。

幼児期運動指針

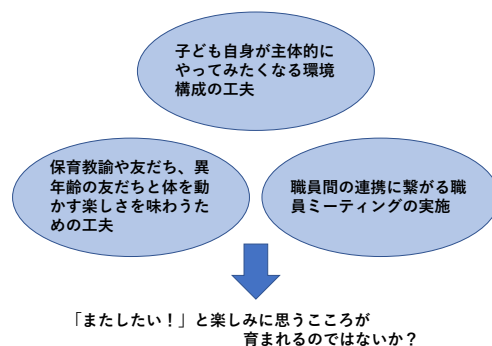
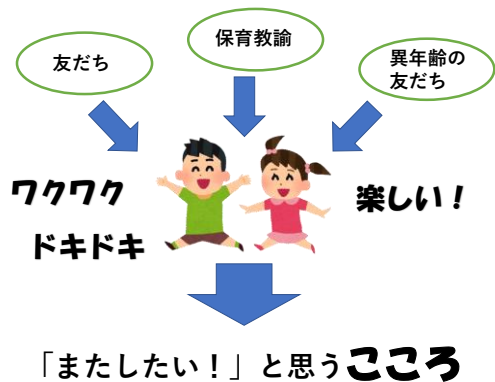


- ・様々な遊びを中心に1日60分以上
体を楽しく動かすこと
- ・多様な動きが経験できるように
様々な遊びを取り入れること
- ・楽しく体を動かす時間を確保すること
- ・発達の特性に合った遊びを
提供すること

「まことの保育」実践

よい子のおやくそく

- わたくしたちは み仏さまを拝みます
真理に対する敬虔な心→手を合わせる**こころ**
- わたくしたちは いつもありがとうございます
当たり前ではないことに気付く心→感謝の**こころ**
- わたくしたちは お話をよく聞きます
自己を省み相手を敬い理解しようとする**こころ**
- わたくしたちは みんな仲良くいたします
どうぞお先にと相手を先にする心→平和を願う**こころ**



やってみたくなる環境構成の工夫



保育教諭や友だちと体を動かす 楽しさを味わうための工夫

シブリング活動について

- ・年少児(3歳児)と年長児(5歳児)の兄弟姉妹ごっこ
- ・年少児はお兄ちゃん・お姉ちゃんに対する親しみの心情を持ち、情緒の発達を促すこと
- ・年長児では、自分の力を発揮して、年少児と接し、遊びをリードし、お世話をしながら、主体性、協調性、思いやりの心を育むこと

ペアリング活動について

- ・年中児(4歳児)同士のペア活動
- ・色々な友だちとの関わり方を知り、協力したり遊びを工夫したりしながら、相手への理解を深め、自分の力も発揮していくこと



職員間の連携に繋がる研修・会議の実施

- 教育・保育要領の読み合わせ
- 10の姿の事例検討と協議
- 異年齢のクラスの職員や同学年の職員
とのミーティング

研究の成果

やってみたくなる環境構成の工夫から見られる成果

- ・「またしたい!」「やってみたい!」という子ども達の思いが広がり、楽しみに思うところに繋がった。

友だちと体を動かす楽しさを味わうための工夫から見られる成果

- ・友だちや保育教諭、異年齢児と一緒に体を動かして遊ぶ中で、動きを工夫したり、真似をしたりしながら、自然に多様な動きを経験することができた。

職員間の連携に繋がる職員ミーティングの実施からみられる成果

- ・子ども自身が主体的に遊びに夢中になって取り組めるような環境を具体的に共通理解することができた。
- ・異年齢のクラスの職員と指導計画を検討することで異年齢での活動機会が増えた。

今後の課題

○保育教諭と子どもたちが協力して遊びを楽しむことはできていたが、主体的に自分たちでやってみようというところまでは至らなかったため、今後検討する必要がある。

○保育時間が長くなる中、保護者との連携をどのように行っていくか具体的に考えていく必要がある。

こども園の願い(今後の方向性)

